



清末期における嚴修の天津音楽教育に与えた影響

楊, 慧

(Citation)

国際文化学, 37:82-101

(Issue Date)

2024-03-18

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100487650>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100487650>



清末期における嚴修の天津音楽教育に与えた影響

The Impact of Yan Xiu on Music Education in Tianjin during the Late Qing Dynasty

楊 慧

YANG Hui

Summary

This study explores Yan Xiu's pioneering efforts in music education of Tianjin in the late Qing Dynasty. Inspired by Meiji era principles from Japan, Yan introduced music education into various educational institutions, emphasizing its role in fostering national patriotism. His initiatives laid the foundation for music education in Tianjin schools. Additionally, his influence extended to the establishment of the Zhili Provincial Gymnastics and Music Propagation Institute(直隸省体操音楽伝習所).

キーワード

清末期、天津の音楽教育、嚴修、日本

I はじめに

本研究の目的は、天津の教育家である嚴修が二回にわたる日本での教育考察を通じて得た音楽教育への認識が、彼の帰国後どのように清末期の天津の音楽教育に具体的に生かされたのかを明確にすることである。

天津は近代において上海に匹敵するほど豊かな外来の音楽文化を持つ中国の都市として評価されている¹⁾。清朝末期には西洋音楽が初めて導入され、天津は西洋楽隊が設立された最も早い都市の一つであった²⁾。また、天津は「学堂楽歌」が最も早く発展した都市の一つであった³⁾。天津は、中国の西洋音楽の受容・普及において不可欠な役割を担っていたと言える。

西洋音楽が天津に広まる過程で、日本は重要な役割を果たしたと考えられる。1871年、『日清修好条規』によって、日本は天津を拠点にして華北への進出を開始した。1904年以降、天津が所属していた直隸省は、日本をモデルに新式教育改革を実施した。そのため、清末期において天津と日本は緊密な関係を持ち、天津の音楽文化発展においても日本から受けた影響が多いと言える。しかし、この時期における天津と日本とのつながりは従来の研究

ではあまり注目を浴びていない。

清末期の天津における音楽教育と日本との関連は、筆者の調査した限り、靳学東編著の『近代天津西洋音楽史』において、時代背景として少し触れられている。その中で、厳修が日本の音楽教育の影響を天津にもたらした先駆者であることが言及されたが⁴⁾、詳細には議論されていない。

厳修(1860～1929)は咸豊十年(1860)年に北京の東部にある三河県で生まれ、字は範孫、号は夢扶である。厳修は、日本の制度を取り入れて、清末期の教育全般について近代的制度を整えた教育者である。彼は2回にわたって日本で教育視察を行い、帰国後日本の教育モデルを参考に、天津において数学、哲学など新式学科が開設された新式中小学校を設立し、また、天津の最初の蒙幼院、女学校なども創設し、つまり、天津の新式教育の基礎を築いた⁵⁾。彼の清末期の天津の教育界への貢献を論述する研究成果は既に多いと言えるが、彼の音楽教育における活動を詳しく分析する研究はほぼない。

筆者は、厳修が2回にわたる日本での教育視察の時、日本の音楽教育とどのように接触し、どのような認識を得たかを分析した。紙幅の関係でこれは別稿にまとめたが、その内容は本論の展開の前提であるため、ここでまず簡単に厳修が日本での教育視察において獲得した認識の要点をまとめる。厳修は二回日本の教育機関の視察を行い、日本滞在中に日本の音楽教育の礎を築いた伊沢修二と数回交流し、音楽教育が知識の向上と国民教化に貢献する重要な手段であることを認識した。また、小・中学校、女学校など様々な種類の学校での音楽授業を視察し、幼児教育、初等教育及び女子教育において実際に音楽が活用されることを見聞した。さらに、西洋音楽や中国の伝統音楽を含む様々な音楽会を鑑賞するなど、音楽に関連する多様な活動を経験し、日本では日本人によって西洋音楽に加えて中国の伝統音楽も演奏されていることを知り、自国(中国)の伝統音楽も重要であることを認識した⁶⁾。

本稿は厳修が日本考察から帰国した後の音楽教育活動を中心に、これらの活動が天津の音楽教育発展に与えた影響をめぐって議論を展開する。具体的には、日本側の史料を参考にしつつ、彼が主導して設立した一連の学校における音楽教育の具体的な状況、日本との詳しい関わり、また、天津で設立された中国初の専門的な音楽体操教育機関である直隸省体操音楽伝習所の設立と彼の訪日活動との間接的な関連などを、詳しく分析する。

本稿においては以下の資料を用いる。まず、『学部官報』や『直隸教育雑誌』⁷⁾からは本文に取り上げられた清末期の天津の教育機関や厳修が設立した学校の教員やカリキュラムの情報が読み取れる。また、『厳修東遊日記』や『厳修年譜』⁸⁾からは、厳修の日本における視察活動の詳細と、帰国後の天津における学校創設などの背景が明らかになる。地方紙『大公報』や『益世報』⁹⁾の新聞記事からは、清末期の天津の様々な学校における、音楽授業の開設や生徒の募集状況がわかる。以上のように、直隸省教育の状況を考慮しつつ、厳修の清末に天津における教育活動の実像を明確にし、彼が清末期の天津の音楽教育にもたらした直接的或いは間接的な影響について詳細に考察しよう。

II 天津において厳修が展開した音楽教育活動及び特徴

厳修による天津の音楽教育の発展状況を論ずる前に、まず当時の天津における教育制度

全般の変化、及び嚴修が音楽教育に着手する前の清末期の天津における音楽教育の発展状況を確認しよう。

1840年代以降、天津ではヨーロッパの租界が開設された。これに伴い、キリスト教宣教師が天津に到来した。19世紀後半には、天津における唱歌や楽理などの音楽知識は主にキリスト教系の学校で教授されていた¹⁰⁾。

20世紀初期に入ってから、中国全域において、各地域において新式学堂の設立気運が盛り上がった。『奏定学堂章程』(1904年)の頒布と科举試験の廃止(1905年)に伴い、理科、英文、衛生、手工など新たな学科があった新式学校が相次いで清国各地で開設されてきた。

直隸省(天津市はここに所属していた)は直隸省総督の袁世凱の支持を得ながら、また嚴修を代表とする地方の有力者の果たした役割を踏まえ、全国の新政推進の中でモデル地域となり、清末期における全国の新式教育の興隆の中で主導的な役割を果たしていた¹¹⁾。しかし、音楽教育の発展状況は遅れていたと言える。

1905年2月、天津市と隣接していた保定市の直隸師範学堂に赴任し、音楽教師を担当した近森出来治(1875~1940)は、保定市の音楽状況について、「ピアノ、オルガン等西洋楽器の一も有るなく教育的歌曲亦絶対的皆無なれば」と描写した¹²⁾。このような記述から、1905年まで直隸省の音楽教育はほぼ始まっていなかったと考えられる。また、1902年に、袁世凱は光緒皇帝に直隸高等師範学堂(保定)¹³⁾の課程を提案したが、音楽には言及していなかった¹⁴⁾。ここから、音楽という教科の重要性は直隸省の官員にあまり認識されていなかったと考えられ、直隸省の音楽教育の設置は他の教科より遅れていたことも読み取れる。現在のところ、その時期の天津の音楽教育の状況を直接に描写した資料は見つかっていないが、天津市と隣接していた保定市の直隸師範学堂天津の音楽教育の状況を反映するわずかな資料から、当時の天津の音楽教育状況も推測できる。以上挙げられた二点の資料から、天津市の音楽教育も1905年まで、官僚にあまり重視されていなかったと推測される。

このような状況を考慮すると、嚴修が1904年第二回訪日を終えてから本格的に着手した音楽教育は、清末期の天津において中国人が自ら組織した音楽教育の嚆矢といえよう。では、嚴修は天津で具体的にどのように音楽教育を展開したのかを見てみよう。

2.1 嚴修の二回目の訪日途中で天津の音楽授業開講のための準備

嚴修が本格的に天津に音楽教育を導入したのは、彼が帰国した後であった。だが、実際には、彼は二回目の日本訪問の際に、既に天津での音楽教育のために楽器の購入や教師の招聘などの準備を始めていた。

1904年7月26日に、嚴修は東京の貴臨館(神田区駿河台袋町9番地、現・千代田区神田駿河台1丁目)で下宿していたが¹⁵⁾、天津の学堂(詳細不明)のために楽器を購入するために、他の数人と共に車で横浜まで赴き、歩いて日の出町まで行き、明治時代の日本で名高い楽器製造メーカーである西川風琴製造所を訪れ、オルガンを二台を購入した¹⁶⁾。西川父子¹⁷⁾が製造した楽器は日本国内だけでなく、西洋でも人気が高かったのである¹⁸⁾。このように、嚴修は天津の音楽教育に向けて真剣に取り組み、熱心に準備する姿勢を見せる。

また、8月5日と6日に、嚴修は渡辺龍聖¹⁹⁾と音楽教習²⁰⁾の招聘について二日連続で討論した²¹⁾。渡辺は中国で音楽を指導するに相応しい三人の候補者を推薦したが、それは多(田)

梅雄²²⁾(明治25年卒業、東京音楽学校の教授)、吉田信太²³⁾(明治28年卒業、広島高等師範学校助教)、そして鈴木米次郎²⁴⁾(明治21年卒業、東京高等師範学校助教兼教諭)であった。給料については、渡辺は「手工教師が130円であるのに対し、音楽教師は120円がいい」と提案したが、厳修は手工と音楽教師の給料は同じであるべきと主張した。三人は、その履歴書などによると、年齢が三十代半ばであり、十年以上の教育経験を持ち、当時の日本の大学で教職に就いた優秀な教育者である。

二人の議論の結果、鈴木米次郎が1904年に直隸師範学堂へ赴任することになった²⁵⁾。鈴木は特に1902年から清国留学生会館で留学生に対して唱歌教育を行い、東京の弘文学院²⁶⁾で音楽の授業を担当した経験を持っていた²⁷⁾。鈴木が清国留学生と緊密な交流を持っていたことから、彼が選抜されたと推測される。

以上のように、厳修は慎重に三人の日本人音楽教師を繰り返し比較し招聘する人物を決定した。この過程から、厳修がいかに政府の資金を大切に扱い、厳しい基準に基づいて相応しい教員を招聘しようとしたかがわかる。

2.2 低年齢の生徒に向けて開設された音楽授業

厳修が天津で展開した音楽教育は、彼が日本で観察した音楽教育の実施状況と類似した特徴を持ち、主に蒙養院や小学校の中で行われた。

2.2.1 蒙養院における音楽教育

天津の最初の幼児向けの音楽教育は、厳修によって設立された蒙養院²⁸⁾の中で行われた。内容は主に唱歌であった。蒙養院は1905年に開校され、4歳から6歳の子供30名を対象にしていた²⁹⁾。厳仁清(厳修の孫)の回想文によると、蒙養院の設備のほとんどは日本から購入された。ピアノやオルガン、唱歌集などの音楽教育に関連する教材も含まれていた。授業の内容もほとんど日本語から翻訳された歌曲であり、礼儀や動植物に関するものが多かったとされている³⁰⁾。

また、1907年3月の天津地域の画報新聞『醒俗画報』³¹⁾には、「參觀蒙養院紀盛」(図1)という挿画が掲載された。この挿画では、大野鈴子のピアノに合わせて、幼児教師の韓昇華(詳細不明)が児童たちを率いて歌曲を歌っている様子が描かれていた。大野鈴子は厳修が初回日本訪問時に出会った愛珠幼稚園の日本人教習であった。



図1 「參觀蒙養院紀盛」

この絵によると、その日に教授した唱歌は『兎兎兎兎』であったとされるが、残念ながら『醒俗画報』に記載された『兎兎兎兎（筆者注：ウサギ、ウサギ）』のメロディーは確認できていない。しかし、図の下部の文字により童謡の歌詞は確認できる。

原文：

兎兎兎兎、請問為何你有圓眼精？為得東西看的清、故有圓眼精。

兎兎兎兎、請問為何你有大耳朵？為得声音聽的多、故有大耳朵。

兎兎兎兎、請問為何你有四条腿？為得行路跑如飛、故有四条腿。

拙訳：

ウサギウサギ、なぜ丸い目があるのか。はっきり見るために丸い目がある。

ウサギ、ウサギ、なぜ大きな耳があるのか。多くの声を聴くために大きな耳がある。

ウサギ、ウサギ、なぜ四つの足があるのか。飛ぶように走るために四つの足がある。

日本語のわらべ歌の中には、「ウサギ、ウサギ」という曲があった。歌詞は、「うさぎ うさぎ 何見てはねる 十五夜お月様 見てはねる」である。「ウサギ、ウサギ」は伊沢修二編の『小学唱歌』第2巻の「俗楽調（第一種の旋法例解）」という部分に収録されている³²⁾。伊沢修二と巖修の人間関係を考慮すると、伊沢修二編の『小学唱歌』は、巖修が日本からもたらした可能性が高いと推測できるだろう。

中国語の歌詞と、日本のわらべ歌の「ウサギ、ウサギ」の歌詞を比較すると、類似している部分が見られる。特に、最初の歌詞には「兎が見ている」という共通の場面描写がある。また、「兎兎兎兎」と「ウサギ、ウサギ」、「なにみてはねる」と「請問為何你有圓眼精」という二つのフレーズの文字数も近い。しかし、メロディーが不明なので、「兎兎兎兎」が「ウサギ、ウサギ」をもとに改編されたかどうかは現時点では確認できないが、うさぎ、という身近な小動物をテーマにした歌曲を子供の教育に用いるという手法は日本の『小学唱歌』から発想を借りたのかもしれない。

『小学唱歌』の「緒言」によると、本書の主旨は「小学生徒……智徳の養成と身体の發育」、「勅語の旨意を貫徹する」などの目標を掲げていた。つまり、音楽を利用して子供たちの「徳育」と「知育」を開発させることが意図されていたようである。巖修の日本での訪問を通して、伊沢修二から音楽教育が国家建設においてどのような意味を持つのかを認識し、伊沢の国家主義的な色合いを帯びた音楽教育思想と接触でき、また音楽教育が人の「知力体力」に大きな影響を与えることができると認識するに至っていた³³⁾。このように、巖修は、伊沢修二の音楽教育を参考に、唱歌の手段を通して、蒙養院の児童たちに向けて徳育を行った努力が見える。

巖修が設立した蒙養院を先頭として、天津の幼児教育は徐々に充実していった。蒙養院の設立に伴い、唱歌が幼児教育に広まっていった。巖修が設立した蒙養院は民立の幼稚園であったが、1908年8月には、天津で最初の官立の蒙養院である北洋第一官立蒙養院が設立され、生徒の募集が始まった³⁴⁾。この学校は開校当初から「唱歌」という科目が開講されていた³⁵⁾。以上のように、巖修が着手した音楽教育をはじめ、幼児に向けた音楽教育は、天津で着実に根付いて行った。

2.2.2 小・中学校における音楽教育

厳修が音楽教育を展開したもう一つ重要な教育機関は小学校であった。

1902 年に政府による『钦定小学堂章程』³⁶⁾と『钦定中学堂章程』³⁷⁾が公布された。これにより、清国の教育制度に小学—中学—大学という近代的な教育モデルが導入された。天津の新式小中学校もこの時代風潮の影響を受け、急速に発展してきた³⁸⁾。しかし政府の財政力の不足もあったので、天津地方では、まず、郷紳（地元の有力者、文化人）たちが協力して私立の小中学校を設立することとなった。

1903 年 2 月 16 日に、天津で最初の私立学校である私立第一小学堂（1907 年に天津私立第一両等小学堂と改称）が設立された³⁹⁾。厳修はその責任者であり、他の直接設立者は郷紳の林墨卿、王寅皆、王竹林、李子赫他 1 名の計 6 名であった⁴⁰⁾。

1904 年と 1907 年にこの小学堂で教授された具体的な科目を示す（表 1）。

表 1 1904 年と 1907 年の科目比較表

年代	1904 年	1907 年
科目	修身・読経・衛生・歴史・作文・輿地・習字・講文・英文・筆算・理科・珠算・幾形・手工	修身・読経・講経・中国文字・算術・歴史・地理・格致・博物・物理・生理・図画・天然・幾何・体操・手工・英文・音楽（高等一級 ⁴¹⁾ ）

出典：1904 年の「天津学堂調査表」と 1907 年第 19 期『学部官報・京外学務報告』により筆者作成。

表 6 によると、1903 年に創立されてから 1907 年までの 4 年間に、私立第一小学堂の規模が拡大され、学年も増加され、特に科目の種類に変化が生じた。すなわち、改革した後の私立第一両等小学堂では、高等一級の学年にのみ制限されていたものの、音楽授業が本格的に導入されていた。

また、1907 年第 19 期の『学部官報・京外学務報告』によれば、私立第一両等小学堂の音楽授業を担当していたのは、日本からの留学生であった。表 2 に示した通り、7 人の教員が雇用されていた。そのうち 2 人は日本留学から帰国した中国人で、日本宏文速成師範卒業生である閻鴻業と日本音楽学校⁴²⁾で勉強したことがある張玉斌であった⁴³⁾。閻鴻業は読経（四書五経の講読）と手工を教え、音楽の担当は張玉斌であった。今のところ、この小学堂に使用されていた教科書などの具体的な教材は残念ながら見つからないが、音楽を担当したのは、日本の音楽学校で勉強した張玉斌という人物なので、日本の音楽教育に倣った方法で授業が行われたと推測される。

表 2 教員の表

人員	担当の授業	備足
----	-------	----

堂長 劉宝廉	国文、修身、図画	遊歴日本一回
監学 華鳳阿	——	——
教員 閻鴻業	読経・手工	日本宏文速成師範卒業生
教員 華世欽	歴史・地理	——
教員 華沢洪	歴史・算学・格致	師範伝習所生
教員 孟広	算学・格致、英文も兼任	師範伝習所生
教員 張玉斌	音楽	日本音楽学校生
教員 曲鶴鳴・張陸経	体操	陸軍下士官

出典：1907 年第 19 期『学部官報・京外学務報告』により筆者作成。

1903 年から 1907 年までの僅か 4 年間で、国立第一小学堂に学年や科目の増加があった理由を明言する史料はないものの、学校の責任者であった嚴修の影響が見逃せないだろう。1904 年 5 月～8 月、嚴修は 2 回目の日本での教育考察を行った。1902 年 8 月～11 月の 1 回目の考察と共に考慮すると、嚴修が視察した、音楽教育を実践していた学校は次のようにまとめられる（表 3）。

表 3 音楽教育の実行された学校

類別	学校名	校数
幼稚園	愛珠幼稚園、養育院、富士見小学校隣接の幼稚園、常盤小学校附属幼稚園、富士見幼稚園	5
小学校	淇澳小学校、富士見小学校、西天満小学校、高等師範附属小学校	4
女学校	女子高等師範学校、華族女学校、女子大学、実践女学校	4
大学	東京音楽学校、高等師範学校	2
中学校	無	0
そのほか	体操学校	1

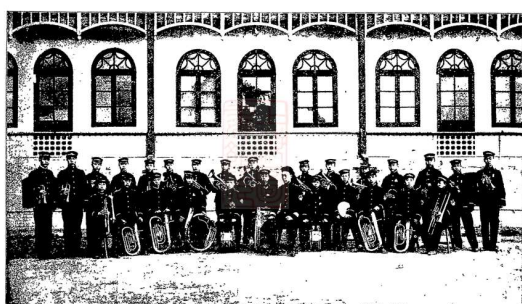
注：『嚴修東遊日記』の第 1～132 頁、第 148～235 頁により筆者が作成した。

表 8 で示した通り、嚴修が観察した音楽教育は、主にほぼ低学年の児童向け、つまり幼稚園と小学校の中で行われた。このような現象は、明治時期の日本の音楽教育の実施状況とも関わっていると考えられる。明治期、日本の近代教育制度が確立し、学校教育の中に「唱歌」という科目が位置付けられるようになった。しかし、主に幼児教育や小学教育など初等教育の場で実施され、中学教育で行われた例は極めて少なかった⁴⁴⁾。このような特徴は、嚴修が主に担当していた天津の国立第一両等小学堂での音楽授業導入の進展にも影響を与えたと考えられる。

天津の国立第一小学堂を先頭として、嚴修が設立した学校では「音楽」の授業が整備・確立され、天津の他の学校にも音楽教育が広がっていった。国立第一小学堂に続いて設立された天津国立第二小学堂でも「音楽」の授業を開設するようになった⁴⁵⁾。嚴修は自分が設立し

た民立の中小学校で音楽授業を導入するために先頭に立ち、天津の多くの学校が音楽課程を導入するきっかけとなった。例えば、1907年に直隸省の学務員が中央教育学部に提出した小学校調査報告書によると、保定官立第一、第二、第三、第五初等小学堂、清苑県官立高等小学堂、両等模範小学堂など直隸省の他の公立学校でも音楽教育が実施されていたことは明らかである⁴⁶⁾。

一方、天津の中等教育における音楽教育の全体的な状況については、筆者が調査した限り、明確な記録が見当たらない。ただし、厳修が設立した最初の私立中学校である天津私立第一中学堂（現在の南開中学校の前身）に学生軍楽隊が設置され、音楽教育が導入されたことが次の写真からわかる（図2）。1910年の『直隸省教育雑誌』（第二巻第5期）には、様々な楽器を演奏する軍楽隊の学生と指揮者が写っている写真が掲載されていた⁴⁷⁾。この写真は、厳修が日本から帰国して約6年後の1904年頃には、天津の中学校でも音楽教育が導入され、しかも、簡単な唱歌にだけでなく、比較的専門的な技能が必要とされる器楽合奏にまで、教育水準が達したことを示唆している。



影 攝 隊 樂 軍 生 學 堂 中 一 第 立 私 津 天
図2 天津私立第一中学堂学生軍楽隊撮影

III 女子教育に応用された音楽教育

厳修が日本へ赴いた際に、もう一つ影響を受けた教育機関は女学校であった。「天津の女学振興の起点」⁴⁸⁾と位置付けられた厳氏女学校に導入された音楽授業は、清末期の天津の女子教育における音楽教育の始まりと考えられる。次に、厳氏女学校の音楽教育を例に、清末期の天津の音楽教育における日本からの影響を分析する。

3.1 厳修による女子教育への音楽教育の導入

1902年に厳修によって創設された厳氏女塾は、1905年に「厳氏女学校」と改称された。これは女子を受け入れた小学校に当たるものであった。学校は「高小」と「初小」の二つの級（学年）に分けられ⁴⁹⁾、具体的な科目として国語、英文、日本語、数学、理化、史地、音楽、図画が教習された。日本から招聘された川本氏（詳細不明）が音楽と日本語を教授した。

音楽授業の他にも、厳修は女学校の生徒たちのために「纏足廃止の歌」（原文：放足歌）という歌詞を創作し、最初、この曲は厳氏女塾の中で歌われ、その後、社会でも広く受け入れられた⁵⁰⁾。歌詞は以下になる。

原文：

一、五齡女子吞聲哭，哭向床前問慈母。

母親愛兒自孩提，如何縛兒如縛雞。
兒足骨折兒心碎，晝不能行夜不寐。
鄰家有女已放足，走向學堂去讀書。
二、少小學生向母提，兒後不娶纏足妻。
先生昨日向兒道，纏足女子何太愚。
書不能讀字不識，困守閨門難動移。
母親愛幾自孩提，莫給兒娶纏足妻。

拙訳：

一、悲しく泣きながら、五歳の女の子が優しいお母さんに尋ねる。母親は私を幼い頃から愛してきたのに、何故私を鶏を縛るように縛り付けるのであるか。私の足は骨が折れて心が碎かれるほど痛いので、昼間は歩けず夜は眠れない。隣の家の女の子はもう足を解いて学校に通っている。

二、少年は母親に言い、将来、縛られた足の妻を娶らない。昨日、先生は纏足の女子はなんと愚かだろうかと言われた。本も読めず字も知らないまま、家に閉じこもって動けなくなっている。私を幼い頃から愛してきた母親は、私が将来纏足の女房にならないようにしてくれるだろう。

この歌詞は、厳修は音楽を利用して女子生徒に纏足の風習に断固として反対する思想を宣伝しようとした姿を示している。

また、女学校以外に女子が教育を受けられるもう1つの場所として、蒙養院教員を育成する保母講習所が存在した。

1905年に、天津で最初の蒙養院に付設された保母講習所が設立され⁵¹⁾、教師見習いが実習を行う場としても機能していた。厳修は、保母講習所の音楽教習として蒙養院教習の大野鈴子を招聘した。大野鈴子は保母講習所で音楽に関する保育法、音楽、ピアノを教えた。彼女は教師見習いたちに厳しい訓練を行い、結果として卒業時には少なくとも行進曲を演奏できるようになり、中にはさらに難しい曲を演奏できる者もいた。授業中、大野はまず自らピアノを演奏したり、唱歌や遊びの指導法を示したりし、教師見習いたちに手本を示した。その後、彼らはそれを子供たちに教え、大野はそばで指導した⁵²⁾。

このように、厳修は女子が教育を受けられる教育施設の中で、積極的に音楽教育を展開し、そこでは日本人の教習が教育に当たった。

3.2 厳修が女子教育に音楽を導入した目的に関する分析

ここからは、厳修はなぜ音楽を利用して女性解放を推進したのかを分析する。

同じく儒教思想を中心に設立された日中両国は、古代から女性に対する見方は儒教思想に基づいて形成されてきた。儒教の国家観において、女性の存在は、生育の価値以外、ほぼ何の価値も認められなかった。そのため、19世紀の半ばまで、女性は国家と関係しないものと考えられていた⁵³⁾。

しかし、明治10年代から、為政者や知識人の女性に対する認識が変容し始めた。女性を国家に結びつける、つまり、国家に貢献するための女性の促進が提唱された。明治20年代以降、特に日清・日露の両戦争後、女性教育を国策の手段と見なす考え方は露骨になっていった。そのため、女性教育が国家建設の一環としてさらに重視され、教育を通して女性の国家に奉仕する義務は宣べ伝えられた。この時期において、女性が国家に奉仕する道としては、直接的に「国家のため」ではなく、「良妻賢母」⁵⁴⁾として間接的な役割を担うことが義務付けられていた⁵⁵⁾。

このような特徴は男女学生が受けた教育の内容にも影響を与え、更に、学生の卒業後の進路は男女で大きく異なっていた。具体的には、男子教育の内容は社会的地位を獲得するための知識や技術を重視していたが、女子教育では「良妻賢母」としての教養を身に着ける目的が主であった⁵⁶⁾。そのため、明治期の日本の女学校では、「音楽」や「図画」などの学芸に関する授業、「裁縫」や「家政」などの家事能力を向上させる科目が設けられていた。これが、厳修が訪日した際に日本の女学校で多くの音楽授業に触れることになった理由である。

中国社会においては、「女子は才能を持たないことが美德である」や「三従四徳」などの倫理道徳が数百年に渡って主流思想であり、漢民族の女子が足を縛り付ける(纏足を指す)ことは、そのような思想を女性の身体に表象したものと考えられる⁵⁷⁾。日清戦争以降、民族的危機感から、救国図強の道を探る一つに女性問題が提起された。経元善や蔡元培などの知識人が纏足の廃止と女子教育の重要性を強調し、女子学堂の設立や女学報の出版などが行われた⁵⁸⁾。つまり、この時期の中国知識人は、隣国の日本に実施された女子教育から、国家主義的な良妻賢母思想を内核とする女子教育を巧妙に国家の建設と結びつける方法を発見した。

厳修は伝統的な中国士大夫の一員として、上記に述べた国家建設の理念から出発し、天津地区で中国人の自主的な主導による女子教育を始めた。彼は音楽の専門家ではなかったため、音楽自体に対する理解が薄かった。そのため、彼が唱歌を主とする音楽教育を天津の女学校に導入したことは、日本の女子教育の内容を直接に模倣したものと考えられる。そのため、厳修が女性に提供した音楽教育活動は、専門的かつ包括的な知識を網羅するものではなく、大半は理解に易い唱歌であった。

厳修の取り組みに加えて、直隸省の政府や地方紳士たちも協力し、1904年末には天津公立女学堂、1905年には北洋高等女学堂や官立女子小学堂など一連の女学校が設立された⁵⁹⁾。これらの学校において、日本人の教師を招聘して音楽の授業を開講し、女子教育の充実に取り組んだ。例えば、北洋女師範学堂卒業証明書(図3)によると、豊岡梅が北洋女師範学堂において音楽を担当したことは確認できる⁶⁰⁾。北洋女師範学堂は初等と高等学校の女子教員を育成する教育機関であり、設立の最初から「楽歌」は選択科目に入れられた⁶¹⁾。そのほか、天津公立女学堂でも音楽の授業が開設され、担当の教師も豊岡梅であった⁶²⁾。

上記の記録によれば、厳修を起源として、天津地域では音楽の授業を開設することにより、女子教育を充実させ、女子の解放思想を宣伝する現象が徐々に増加していったことが分かる。



図 3 北洋女師範學堂卒業証明書（1908 年 1 月）

3.3 小結

このように、厳修が設立した蒙養院、小中学校、女学校などの近代的教育機関では、音楽教育が国民の知識向上と教化に貢献する重要な手段であるという理念を日本から取り入れ、天津での教育現場で様々な試みを行った。まず蒙養院、小中学校、女学校に共通してみられる日本の制度の模倣は、日本人の音楽教師や日本で音楽を修得した中国人留学生が授業を担当し、唱歌を中心に音楽教育を教授し、日本の教育理念や手法を吸収したことが挙げられる。また、女学校に特有にみられる点として、日本で女学校で音楽の授業が活用されていることに倣い、天津の女子の教養教育を充実させ、女子に社会参画を促すために、女学校での音楽教育に力を入れたことが分かる。

IV 厳修の教育活動の間接的な産物——中国初の専門的な体操音楽伝習所

最後に、厳修の活動とは直接的には繋がらないが、厳修が間接的に天津の音楽教育の発展を推進した事例を紹介する。1907 年に、直隸省体操音楽伝習所（以下「伝習所」と略す）が天津で設立された。この伝習所と厳修の日本での見聞活動との関連を考察してみよう。

伝習所は、中国で初めて音楽と体操の人材を育成するための専門的な機関であった⁶³⁾。通常、授業は天津学務公所⁶⁴⁾の庭園で行われ、雨の日には学務公所（提学使司の行政機関）の集会館を利用して活動した⁶⁵⁾。伝習所に関しては、尚大鵬（2008）が詳細な研究を行い、伝習所の規則と章程を利用し、職員、教育活動、経費、設備などの基本情報を明らかにした⁶⁶⁾。ただし、尚大鵬の研究は主に伝習所の体育授業に焦点を当てているため、伝習所がなぜ専門的な音楽教育も実施したのかについては詳しく分析されていない。また、本機関の設立と厳修の日本での教育考察との関連についても、言及されていない。

4.1 厳修の伝習所の設立への間接的な影響

4.1.1 直隸提学使司の官員たちの訪日体験における厳修とのつながり

まず、伝習所の設立と直隸提学使司の官員たちの訪日経験は緊密に関わっていたと考えられる。

伝習所は直隸の提学使司によって設けられた。全国の教育事務を管理する中央教育管理部门である学部は、全国の教育行政の統一を図るため、1906 年 5 月に各省に命じて新式教育行政機関である提学使司を設立した。学部は提学使（提学使司内の最高職位）に対して、

率先して日本へ赴き、教育の調査と考察を行うことが義務付けられていた⁶⁷⁾。当時、厳修は学部で侍郎(1906～1910)を務めており、任期中に章程や政策の策定に主導的な役割を果たした⁶⁸⁾。したがって、各地の提学使が日本を訪問し教育環境を調査することを義務化する政策は、厳修自身が日本を訪れて教育を考察した体験に基づき、その有用性を強く感じたことと密接に関連していたと言えるだろう。

提学使らは日本で教育を考察していた際に、日本の音楽教育を見学する機会を獲得した。清国官員が日本を訪問した 20 世紀初期には、音楽授業はすでに日本の学校で広く普及していた。専門的な音楽教育機関である東京音楽学校を始めとする様々な音楽教育を実施できる機関が各地に存在していたのである。天津の官員たちが日本を訪問した際には、日本の音楽授業を見学し、その体験を記録していた。そのため、提学使たちが日本での教育考察の過程で音楽教育の重要性についての認識を得たことが、伝習所の設立のきっかけとなったと考えられる。

4.1.2 直隸省提学司の提学使である盧靖との関連

また、伝習所の設立には、直隸省の初代提学使である盧靖(1856～1948、字木斎、勉之、湖北省人)の音楽教育への認識が深く関わっていると考えられる。

1907 年、「直隸提学司附設音楽体操伝習所試辦章程」が発表され⁶⁹⁾、同年の十一月初六日(陰暦)の朝 8 時に、音楽体操伝習所入学を目指し、先に天津に到着した一部分の学生たちを対象に入学試験が行われた。十一月十八日(陰暦)の朝 8 時には二回目の入学試験が行われた⁷⁰⁾。1906 年から 1907 年にかけて、盧靖は直隸省提学司の初代長官を務めていた。つまり、伝習所は盧靖の任期中に設立され、運営を始めたと考えられる⁷¹⁾。

盧靖は直隸提学使を担当していた時、時には北京に赴き、直隸省の教育や天津の学務官僚の確定などの事務に関して、厳修と相談した。『厳修日記』の中で、「木翁と話し合った」のような内容が見られ⁷²⁾、厳修と親交を持っていたことが分かる。ここから、盧靖は厳修の教育思想をよく知った上で、天津の教育事業を展開した可能性が高い。つまり、伝習所の設立も厳修の音楽教育を重視する理念と関連していると言えるだろう。

また、盧靖は厳修が帰国した翌年、つまり 1905 年に日本へ教育視察に赴いた⁷³⁾。この機会を通じて、盧靖は日本の音楽教育を見学し、音楽教育の意義を理解する機会を得た可能性がある。彼は、中国の伝統的な士大夫知識人たちが音楽教育を軽視する傾向にあったのに対し、音楽が民衆の思想啓蒙において重要な意義を持つことを唱え、音楽が公衆演説、新聞、戯曲、歌謡、絵画などと同様に、民智を啓発するための重要な手段の一つであると主張した⁷⁴⁾。このように、盧靖は直隸省の教育業務を担当していた期間に、中国初の音楽・体操専門家を育成する教育機関の誕生を推進したと考えられる。

総じて、前述述べた二つの要点から、厳修は提学使司と密接な関連を持ち、彼の音楽教育理念が伝習所の設立に大きく影響を与えていたことが分かる。

次に、伝習所が具体的にどのような面で日本から影響を受けたのかを考察する。

4.2 伝習所の音楽授業における日本との関連

まず、伝習所の職員と日本の音楽教育との関連を見てみよう。

表 4 直隸音楽体操伝習所の職員統計表⁷⁵⁾

身分	名前	出身校	学校の所在地
管理員	李僑	東京音楽学校	日本
司事員	王定保	東文儲材所	日本
教員	村岡詳太郎	東京音楽学校	日本
教員	張玉斌	天津体育会及び東京音楽学校	天津、日本
教員	斎藤伝寿	日本体育会卒業	日本
教員	王承沄	天津英文館	天津

表 4 で示したように、伝習所の職員の中には二人の日本人教習が雇われており、村岡詳太郎 (1881～1940) は音楽の授業を担当したと考えられる。また、英語の教員以外、ほぼ全員が日本で勉強した経験を持っていた。これにより、伝習所の教育環境においては、日本の教育制度の実態をよく知る人物たちが教育に携わっていたことが確認できる。

特に、教員である村岡詳太郎と管理員である李僑 (生没年不明、字恵卿) は、共に東京音楽学校出身であった。李僑は 1905 (明治 38) 年に唱歌科の選科に入学し、1907 (明治 40) 年まで在籍していた⁷⁶⁾。章程によると、李僑は「管理員」としての役割に加えて、日本語の通訳も兼ねていた⁷⁷⁾。職員たちの背景を考慮すると、伝習所の音楽教育は、日本で専門的な音楽教育を受けた人々によって主導されたことが分かる。

次に、伝習所の教学内容について分析する。

伝習所の授業の時間割は次のようである。「唱歌 12 時間、楽器 2 時間、楽典音譜 2 時間、体操 12 時間、遊戯 3 時間、生理衛生 1 時間、教授法 1 時間及び練習 12 時間」である⁷⁸⁾。時間割からは、伝習所の音楽教育が科目ごとに広くに分類され、できるだけ全面的な音楽教育が提供されているという特徴が明らかになる。

伝習所の授業は、20 世紀初期の東京音楽学校のカリキュラムと類似していることが多く見られたため、東京音楽学校を参考に授業を開設したとも考えられる。東京音楽学校の本科を例とすると、声楽部、器楽部と楽歌部という 3 つの学部が含まれ、それぞれの科目が開設された⁷⁹⁾。具体的には、「独唱歌」、「諸重音唱歌」を例とする唱歌の授業、「楽典」、「音響学」など音楽知識を教授する科目、「ピアノ又はオルガン」などの楽器授業、及び「体操」や「外国語」、「詩文」などの教養科目が設けられていた。また、随意科として教育学及び教授法が提供された。東京音楽学校の本科に開設された授業と前述した伝習所の科目を比較すると、20 世紀初期における清国と日本という両国の音楽教育の発展程度の差異から、伝習所は専門内容を東京音楽学校と同様に細分化したカリキュラムを提供することは難しかったが、教育内容の範囲に関しては、基本的に両者は一致しており、主な違いは体操の授業時間の比率にあることが明らかになった。

なぜ伝習所と東京音楽学校は多くの類似性を持っていたかという点、多分厳修からの影響とも関わっているだろう。厳修が日本で教育視察した際に、日本の高等音楽教育機関と最も多く接触したのは東京音楽学校である。彼はそこで音楽会を鑑賞し、学校を見学し、特に

東京音楽学校の前身である音楽取調掛を設立した音楽教育家伊沢修二と緊密な親交を持っていた⁸⁰⁾。天津の専門的な音楽教育機関は東京音楽学校を参考にしたことも、この機関と厳修との関連性を示すことができるだろう。

また、伝習所では、各科目に必要な教材、教学道具が整備された。音楽授業のためには以下のような教学洋品が用意された。具体的には、「瑟亜樂必耶謳（ピアノ）」、「風琴卧路干（オルガン）」、「巴挨鈴（バイオリン）」、「中国之笙笛管簫（中国の笙、笛、管、簫）」、「拍節器」⁸¹⁾、「楽典音譜などの書籍」を指す⁸²⁾。これらの教学道具から、音楽科の授業の内容には、西洋音楽と中国伝統音楽の両方が含まれていると推測できる。

ここで注目すべきは、西洋音楽に加え、中国伝統音楽の楽器が含まれていたことである。厳修は日本で教育視察した際に、伊沢修二に誘われて参加した集会で、明治の明楽演奏者・長原春田が、江戸時代に発行された明楽の歌譜である『魏氏楽譜』(1768)に基づいて3つの明楽曲を演奏した様子を目にした。この時、厳修は日本で中国の伝統音楽が伝承され実践されていることに感嘆した⁸³⁾。厳修の間接的な影響を受けて設立された天津の伝習所では、西洋音楽の教育だけでなく、中国音楽の授業も開講された。このことは、厳修が日本で調査を行った際に、一部の日本の音楽家が中国の伝統的な音楽文化を大切にしている姿勢を目にしたことから啓示を受け、「音楽教育」とは、単に西洋音楽を導入、移植するだけでなく、中国の伝統音楽文化も維持、保存、発展しなければならないという考えを持つに至った結果と考えられないだろうか。

以上述べた点を踏まえると、中国で初めて専門的な音楽教育を実施できる機関としての直隸省体操音楽伝習所が天津で設立された背景には、厳修の間接的な影響が存在していると考えられる。厳修は直隸省提学司の役員たちに音楽教育の重要性を認識させることに影響を与え、その結果として専門的な音楽教育カリキュラムを持つ伝習所の創設に向けた環境を作り出したと言える。

V 終わりに

本研究は、清末期に天津において、率先して幼児、小学、女学などのさまざまな教育分野で音楽教育を展開した教育家である厳修に焦点を当て、厳修が天津で展開した教育活動において、日本の音楽教育がどのように取り入れられたかについて検討し、そこに日本からの影響が明確に現れており、日本の音楽教育との類似点が見受けられることを指摘した。

考察の結果から、厳修が日本での音楽教育視察の体験を活かし、日本の音楽教育を参考にしながら、天津の音楽教育の発展に直接的または間接的な影響を与えたことが明らかになった。

厳修は天津で自ら設立した蒙養院、小中学校、女学校などの新しい教育機関で音楽教育を取り入れる試みを始めた。また、中国初の専門的な音楽教育を提供できる教育機関の設立に不可欠な影響を与えた。天津で展開された音楽教育には具体的には二つの特徴がある。一つ目は、教授された内容は日本の教材、カリキュラムを参考にしており、改編された日本の歌が教えられたり、東京音楽学校と同じ実技科目が実施されたりした。授業の教師の多くも日本からの音楽教師や日本で専門的な音楽教育を受けた中国の留学生で占められていた。

また、中国で初めて専門的な音楽教育を実施できる機関としての直隸省体操音楽伝習所が天津で設立された背景には、嚴修の間接的な影響が存在していると考えられる。嚴修は直隸省提学司の役員たちに音楽教育の重要性を認識させることに影響を与え、その結果として専門的な音楽教育カリキュラムを持つ伝習所の創設に向けた環境を作り出したと言える。

しかも、嚴修は天津地域の地方の郷紳を代表する一方で、政府教育部門の重鎮としての立場も持っていた。本研究により、天津地域での音楽教育の本格的な展開は主に嚴修が直隸省学校司督辦⁸⁴⁾に任命された後、二度目の日本訪問の頃から始まったことが分かる。つまり、彼の音楽教育に関する活動は、自分が設立した民立学校に主に集中していたが、その活動方針は直隸省の公式教育方針にも一定程度反映されていたと言える。このように、天津地域において清末期に嚴修が実施したさまざまな音楽教育に関連する事業は、当時上海地域の「学堂楽歌」運動⁸⁵⁾のように民間力が主導していたものとは異なり⁸⁶⁾、「半民半官」の特徴を持っていたと結論づけられる。

今後の研究として、清末以降、民国前期の天津の音楽発展と日本からの影響に関して引き続き検討するつもりである。

(神戸大学国際文化研究科博士後期課程)

付記

本研究は中国国家留学基金国別区域研究項目の一部分の成果である。

注

- 1) 靳学東「近代天津西洋音楽初探」『津沽楽縁尋跡：天津近現代音楽史料研究』、北京：中央音乐学院出版社、2019年、第5～7頁、第57～58頁。
- 2) 前掲靳学東『津沽楽縁尋跡』、2019年、第5～8頁。
- 3) 前掲靳学東『津沽楽縁尋跡』、2019年、第10頁。張前『中日音楽交流史』、北京：人民音楽出版社、1999年、第356～357頁。
- 4) 前掲靳学東『津沽楽縁尋跡』、2019年、第9～13頁。
- 5) 朱鵬『中国近代教育の成立』、京都：松籟社、2021年、第163頁。嚴修の教育分野における業績について代表的な研究成果は次のようである。朱鵬の『中国近代教育の成立』(京都：松籟社、2021年)、第159～276頁、南開大学校史叢書の『嚴修記念文集』(天津：天津古籍出版社、2021年)、周東怡「清末訪日視察風潮中知識分子的活動——以嚴修的教育活動及其貢獻為探討中心」(『台灣師大歷史學報』第46期、2011年12月、第231～288頁)、McElroy Sarah Coles. *Transforming China through education: Yan Xiu, Zhang Boling, and the effort to build a new school system, 1901-1927*, Yale University ProQuest Dissertations Publishing, 1996.
- 6) 嚴修撰、武安隆、劉玉敏点注『嚴修東遊日記』の第1～132頁、第148～235頁に基づいてまとめた。(天津：天津人民出版社、1995年)
- 7) 『学部官報』：清末の学部機関紙。中国近代における最も早い国家教育行政公報であり、学部図書館によって編集された。光緒32年7月(1906年8月)に北京で創刊された。最初の1、2号は月刊であり、第3号からは10日ごとの刊行となった。この紙は学務に関する公告や各国の教育、教育史、教授法、カリキュラムなどに関する論文や文書を専門に掲載し、評論は発表しなかった。
『直隸教育雑誌』(1905年1月～1911年10月)は『直隸教育官報』とも呼ばれ、直隸省の教育行政公報で、一部の内容、例えば教科書に関する資料は『学部官報』に収録されていなかったが、この資料中にもみられる。
- 8) 前掲『嚴修東遊日記』は『壬寅東遊日記』と『第二次東遊日記』という二つの部分を含み、『嚴修日記』の一部分である。1902年に嚴修と息子二人と日本へ遊歴し、『壬寅東遊日記』を執筆した。1904年に二回目日本へ教育考察し、『第二次東遊日記』を完成し、『甲辰日記』の中に収録された。原稿本は天津図書館で保存されている。
『嚴修年譜』(嚴修自訂、高凌雯補、済南：齐鲁書社、1990年)：譜主である嚴修は、彼自身が年譜1

巻を編纂した。彼の生涯を辛卯年 4 月まで記録しているが、彼の死からまだ 11 年しか経っておらず、それ以降の記録はない。その後 15 年経過し、弟子の高凌雲は、嚴修の自身の年譜のスタイルに従って、戊午年から己巳年までの要点を抜粋して日記を作成し、『嚴範孫先生年譜補』になった。譜主の自身の年譜にはわずかな誤りがあり、高凌雲は補足の注釈を付けていた。文末に高氏が執筆した『嚴公行状』が付属された。1943 年に出版された。

- 9) 『大公報』(1902~1956) は 20 世紀初頭に天津で創刊された。創刊者は満州族の英斂之である。中国語新聞としては発行期間が最も長い。1905 年に社屋は天津日本租界内に移転した。1937 年 8 月、盧溝橋事件からの戦火を避けるために天津版は停刊し、9 月に漢口へと移転した。戦後は天津版、上海版、香港版が復刊し、重慶版と合わせて 4 地域で発行された。評論・教育・経済・文化・国際関係など幅広い分野の記事が収録された。
『益世報』(1915~1949) は『申報』、『大公報』、『民国日報』と共に、「旧中国四大報」として知られていた。天津版の『益世報』は、1915 年 10 月 1 日にベルギーの神父である雷鳴遠によって創刊された。雷鳴遠は董事長に、劉浚卿は総経理に任命された。1937 年 9 月には強制的に休刊させられたが、1938 年 12 月に昆明で復刊した。抗日戦争の勝利後、1945 年 12 月に天津で復刊され、1949 年 1 月に停刊された。
- 10) 前述新学東『津沽楽縁尋跡』、2019 年、第 4 頁。
- 11) 汪婉「直隸省の教育改革と官紳の日本游歴」『史学雑誌』106 (3)、第 84 頁。
- 12) 「近森氏の談・清国の音楽」、『音楽界』第 1 巻第 9 号、47 頁。
- 13) 直隸高等師範学堂 (保定) : 1902 年に袁世凱が設立した直隸省の初めての師範学堂であり、また全国でも最初の師範学堂の一つであった。この学堂は全国から生徒を募集していた。最初は師範完全科と一年、半年の簡易科が開設された。1905 年には、この学堂は高等師範学堂として改称され、初級師範学堂や中学堂の教員および管理職を養成することを目標とした。学堂は中国人教師を採用するだけでなく、11 人の日本人教師も招聘した。
- 14) 「直隸总督袁世凱奏办直隶师范学堂暨小学堂折 (附章程)」1902 年 8 月 11 日、陳元暉編『中国近代教育史資料匯編 実業教育・師範教育』、上海：上海教育出版社、2007 年、第 657 頁。
- 15) 前掲『嚴修東遊日記』、1995 年、第 152 頁。
- 16) 前掲『嚴修東遊日記』、1995 年、第 217~218 頁。
- 17) 西川虎吉 (1849~1920) : 明治時代から大正時代にかけての楽器製造者。日本におけるオルガン製造業の創始者の一人であり、ピアノ製造技師、ピアノ調律師としても活動した。1900 年 (明治 33 年) には、息子の安蔵をアメリカのエステイ社へ留学させて、ピアノ技術を習得させる。1907 年 (明治 40 年) にはグランドピアノの製造に成功する。
- 18) 前掲『嚴修東遊日記』、第 218 頁。
- 19) 渡辺龍聖 (1865~1944) : 日本の教育者、倫理学者、号は乾甫。アメリカのコネル大学で哲学博士号取得。1899 年東京音楽学校の校長を就任。1902 年直隸総督府学務顧問を就任、兼直隸師範学堂、順天中学の総教習。1909 年帰国。前掲張前『中日音楽交流史』、第 300 頁。
- 20) 教習は教師を指す。汪向荣は 19 世紀 90 年代から 20 世紀初期にかけて清国各地の学堂で教鞭を執った日本人教師を「教習」と呼ぶ。そのため、本文ではそのまま「教習」を採用した。汪向荣『日本教習』、北京：商務印書館、2014 年。
- 21) 前掲『嚴修東遊日記』、1995 年、第 232~233 頁、235~236 頁。
- 22) 多梅雄 (1869~1920) : 原文は「雄」であるが、明治初期の音楽家名録を調査すると、「稚」のほうが正しい。平安時代から京の朝廷に雅楽で奉仕した名門の家系多家で生まれた。1900 年、多が作った曲は、地理教育の教材として発売された『鉄道唱歌』の第 1、2、5 集に収録した。『鉄道唱歌』は、鉄道沿線の歴史、地理、風物、人情などを織り込み、七・五調の四行を一章に、第五集まで合計 332 章である。日本流行歌曲史で空前絶後のヒットとなった。大悟法利雄「鉄道唱歌の作者たち」、『なつかしの鉄道唱歌』、東京：講談社、1969 年、第 70~84 頁。
- 23) 吉田信太 (1870~1954) : 作曲家、音楽教師。1894 年東京音楽学校師範部を卒業し、ルドルフ・ディットリヒに師事した。鉄道唱歌の第 4 集「北陸編」を作曲した。1896 年に発表された日本初のワルツとして知られる唱歌『港』は、吉田が作曲し、1896 年に発行された新編教育唱歌集の第三集に収録されている。日本人が作曲した初めての三拍子の曲である。細川周平、片山杜秀監修『日本の作曲家 近現代音楽人名事典』、東京：日外アソシエーツ、2008 年、第 729 頁。
- 24) 鈴木米次郎 (1868~1940) : 日本の音楽家。1888 年に東京音楽学校を卒業し、1906 年に中国を訪問した。帰国後、東洋音楽学校を設立し、中国と東洋諸国の学生を教えた。1902 年、沈心工が江戸の留学生会館に設けた「音楽講習会」の講師となり、音楽理論や歌唱を教えた。1904 年、曾志忞ら中国人留学生が創設した「亞雅音楽会」及び付属の「歌唱講習会」「軍楽講習会」の音楽監督を務めた。その後、中国の学生たちが出版した数多くの音楽教科書を改訂し、序文をつけるなど、近代中国の音楽教育の発展に貢献した。武石みどり『音楽教育の礎 鈴木米次郎と東洋音楽学校』、東京：春秋社、2007 年。
- 25) 前掲汪向荣『日本教習』、2014 年、第 83 頁。
- 26) 弘文学院は 1902 年嘉納治五郎によって創設され、その主旨は「清国学生ノ為に日本語及ビ普通教育ヲ

- 教授」であった。『弘文学院章程要覧』第 1 章第 1 頁、東京大学明治新聞雑誌文庫蔵。
- 27) 武石みどり『音楽教育の礎 鈴木米次郎と東洋音楽学校』、東京：春秋社、2007 年。
- 28) 蒙養院は清末の教育制度の中で最も初級の学校であり、家庭教育を補足するために設置された。主に 3 歳から 7 歳までの子供を募集していた。今の「幼稚園」と同じような役割を果たした。
- 29) 来新夏『天津近代史』、天津：南開大学出版社、1987 年、第 289 頁。
- 30) 嚴仁清「回憶祖父嚴修在天津創辦的幼兒教育」、天津市嚴修研究会等編：『嚴修記念文集』、天津：天津古籍出版社、2021 年、第 301 頁。
- 31) 侯桀、王昆江『醒俗画報精選：清末民初社会風情』、天津：天津人民出版社、2005 年。
- 32) 伊沢修二『小学唱歌』、『音楽基礎研究文献集』第 17 卷、東京：大空社、1991 年、第 46 頁。
- 33) 楊慧「嚴修の日本教育考察過程における音楽体験 (1902～1904)」、『中国研究月報』、投稿中。
- 34) 『大公報・天津版』1908 年 8 月 30 日、第 01 版。
- 35) 『大公報・天津版』1909 年 6 月 10 日、第 06 版。
- 36) 『欽定小学堂章程』1902 年に發布された中国の近代教育に関する最初の公式な学制規定の文書である。清朝の管学大臣である張百熙が策定を主導した。小学堂は、「授けること：道德、知識、および身体に有益なすべての事柄 (授以道德、知識及一切有益身体之事)」という目的を持っており、官立と民立の 2 つの種類に分けられた。しかし、この規定は実施されず、1904 年 1 月 13 日に『奏定学堂章程』が發布され、これにより、この章程も廃止された。
- 37) 『欽定中学堂章程』本章程の一部には、中学堂に関する記述があり、その目的は高等小学堂の卒業生に対して「程度を深め、科目を追加し、普通の学問に深みをもたせ、高等専門教育の基礎を築くこと」であった。これは官立と民立の 2 つの種類に分かれており、16 歳以上の高等小学堂の卒業生を受け入れることが規定されていた。
- 38) 「直隸省全省中学堂現行詳章」、『東方雜誌』1908 年第 3 期、第 63～64 頁。
- 39) 『大公報』1903 年 7 月 26 日。
- 40) 朱鵬「嚴修の新学受容過程と日本一其の二・天津の紳商と近代初等学堂をめぐって」『天理大学学报』51 (1)、第 184 頁。
- 41) 天津民立第一両等小学堂には、「高等」と「初等」という二等が含まれた。「高等」には二級が設置され、「初等」には三級があった。この「級」は「学年」を意味する。
- 42) 近代において、東京には「日本音楽学校」という名前の音楽学校が存在していたが、同校が「日本音楽学校」と称するのは 1927 年 (昭和 2 年) 以降で、それ以前は「音楽遊戯協会講習所」と呼ばれていた。したがって、1907 年以前に留学した張氏が通った学校は、日本音楽学校ではなく、別の日本の音楽学校であったということになる。また、「直隸音楽体操伝習所調査表」(『中国近代学制史料』(第二卷・下)、上海：華東師範大学出版社、1992 年、第 554 頁。)には、音楽の授業を担当した教師の名前が記載されており、その中に「張玉斌」という名前があることが分かっている。同資料によると、張玉斌の出身校は東京音楽学校であるとされている。同一人物である可能性があるため、民立第一小学堂の音楽教師としての張玉斌は、東京音楽学校で学び、帰国したと考えられる。
- 43) 1907 年第 19 期「奏派調査直隸学務員報告書 (続)」、『学部官報・京外学務報告』、全国報刊索引データベース、<https://www.cnbkssy.com/>。
- 44) 松本正「東京音楽学校編『中学唱歌』に関する研究」、大分大学教育学部研究紀要、2016 年、第 76～77 頁。
- 45) 前述 1907 年第 19 期『学部官報・京外学務報告』、全国報刊索引データベース、同上。
- 46) 1907 年第 19 期「奏派調査直隸学務員報告書 (続)」、『学部官報・京外学務報告』、全国報刊索引データベース、同上。
- 47) 『直隸教育雑誌』1910 年第 2 卷第 5 期、全国報刊索引データベース、同上。
- 48) 「女学起点」『大公報』1903 年 4 月 14 日、第 4 面。前述『嚴修年譜』の中でも同じような記述が見られた、第 179 頁。
- 49) 『益世報』、1907 年 1 月 23 日。
- 50) 前掲『嚴修年譜』、第 514 頁。
- 51) 来新夏『天津近代史』、天津：南開大学出版社、1987 年、第 289 頁。前掲嚴仁清「回憶祖父嚴修在天津創辦的幼兒教育」、第 300 頁。
- 52) 前掲嚴仁清「回憶祖父嚴修在天津創辦的幼兒教育」、第 300 頁。
- 53) 布川清司『近代日本女性倫理思想の流れ』、東京：大月書店、2000 年、第 93～97 頁。
- 54) 「良妻賢母」は、女性の主な役割は「良い妻であり賢い母であること」であり、家庭や夫に奉仕することが女性の本分であるとする考え方を示していた。明治以降、女が妻・母役割を果たすことが国家の発展に結びつけられた。つまり、女を端に家族の一員としてではなく、家事や育児、内助などを行う具体的な国民として捉えることにより登場してきたものであった。1890 年代後半には樺山資紀や菊地大麓などの歴代文部大臣によって、良妻賢母の概念が国家公認の女子中等教育の理念として位置づけられた。小山静子『良妻賢母という規範』東京：勁草書房、1991 年、第 57～58 頁。
- 55) 前掲布川清司『近代日本女性倫理思想の流れ』、第 98～101 頁。

- 56) 姜華「高等女学校における良妻賢母教育の実際に関する一考察」『早稲田大学大学院研究科紀要』19-01、2011、第 81～82 頁。
- 57) 谷忠玉『中国近代女性観の演変と女子学校教育』、合肥：安徽教育出版社、2006 年、第 104 頁。
- 58) 前掲谷忠玉『中国近代女性観の演変と女子学校教育』、2016 年、第 106～115 頁。
- 59) 嚴修自訂、高凌雯補、嚴仁曾増編：『嚴修年譜』、濟南：齊魯書社、1990 年、第 179 頁。
- 60) 孫繼南『中国近代音楽教育史紀年 1840～2000』、上海：上海音乐学院出版社、2012 年、第 31 頁。
- 61) 『益世報』、1906 年 7 月 15 日。
- 62) 『益世報』、1907 年 1 月 23 日。
- 63) 前掲孫繼南『中国近代音楽教育史紀年（1840～2000）』、第 36 頁。明治期の日本にも「体操、音楽」を名前に持つ学校がある。例えば、私立東京女子体操音楽学校などは体育指導員養成を目的とした機関である。「伝習所」では、一見すると、「体操」の教育を主たる目的とする教育機関のように見えるが、直隸省の授業の内容や科目の設置時間（「直隸提学司附設音楽体操伝習所章程」『直隸教育雑誌』、直隸学務処、第十八期、全国報刊索引データベース、第 77～78 頁）を見ると、伝習所では日本の東京音楽学校のように専門的な音楽授業が開設されたことが分かった。
- 64) 天津学務公所：1905 年に中央教育行政機関としての「学部」の創設に伴い、1906 年 3 月に直隸省では提学司が設置され、学務処は「学務公所」に改称した。
- 65) 前掲「直隸提学司附設音楽体操伝習所章程」、第 77 頁。
- 66) 尚大鵬「清朝末期における体操科教員養成機関に関する一考察」、『広島大学大学院教育学研究科紀要 第三部、教育人間科学関連領域』51 号、第 67～72 頁。
- 67) 汪婉『清末中国対日教育視察の研究』、東京：汲古書院、2001 年、第 274 頁。
- 68) 関曉紅『晚清学部研究』、広州：広州教育出版社、2000 年、第 159 頁。
- 69) 1907 年第 18 期『直隸教育雑誌』、全国報刊索引データベース、同上。
- 70) 『北洋官報』1907 年第 1507 期の「学台牌示」、『北洋官報』1907 年第 1577 期の「学台牌示」。
- 71) 直隸音楽体操伝習所の設立時期については、先行研究では、尚大鵬は 1908 年 5 月、孫繼南は 1908 年 2 月と主張しているが、筆者の考察によれば、設立の時期はもう少し早いのではないかと推測される。前掲尚大鵬「清朝末期における体操科教員養成機関に関する一考察」、第 68 頁。前掲孫繼南『中国近代音楽教育史紀年（1840～2000）』、第 36 頁。
- 72) 「丙午北京日記」『嚴修日記』第二卷、天津：南開大学出版社、2001 年、転引：朱鵬『中国近代教育の成立』（京都：松籟社、2021 年）、第 193 頁。
- 73) 前掲汪婉「直隸省の教育改革と官紳の日本遊歴」106（3）、第 86 頁。
- 74) 劉行宜『盧木斎、盧慎之兄弟』、中国人民政治協商会會議天津市委員会文史資料委員会編、天津文史資料選輯、第 17 輯、天津：天津人民出版社、2014 年、第 112 頁。
- 75) 前述「直隸音楽体操伝習所調査表」、第 554 頁。
- 76) 『東京音楽学校中国留学生名簿』によると、彼は 1904 から 1908 年にかけて東京音楽学校に在籍していた（前掲張前：『中日音楽交流史』、第 372～373 頁）。しかし、東京音楽学校在籍者データベースによると、彼の在籍期間は 1905～1907 年であった。<http://fms.ms.geidai.ac.jp/f mi/iwp/cgi?db=%EF%BC%96%EF%BC%8E%E6%9D%B1%E4%BA%AC%E9%9F%B3%E6%A5%BD%E5%AD%A6%E6%A0%A1DB&-loadframes>、2023 年 4 月 1 日に検索した。『東京音楽学校』規則によると、選科生は「本校所定各科各学部ノ一科目若クハ数科目ヲ修ム」ことができると規定された。このように、李僑は東京音楽学校で「唱歌」や「バイオリン」、「洋琴」、「風琴」など西洋楽器或いは「箏」など日本の伝統楽器の演奏を教授する科目を聴講できる。財団法人芸術研究振興財団/東京芸術大学百年史刊行委員会編：『東京音楽学校篇』第 1 巻、東京：音楽之友社、1987 年、第 448、465～467 頁。
- 77) 前掲「直隸提学司附設音楽体操伝習所章程」、第 78 頁。
- 78) 前掲「直隸提学司附設音楽体操伝習所章程」、第 77～78 頁。
- 79) 前掲『東京音楽学校篇』第 1 巻、第 465 頁。
- 80) 嚴修の在日音楽活動、及び彼と伊沢修二との交際について、別稿で分析する。
- 81) 拍節器：楽曲のテンポを示す器械。振り子の原理を応用して拍子を刻む装置である。
- 82) 前掲「直隸提学司附設音楽体操伝習所章程」、第 80 頁。
- 83) 前掲『嚴修東游日記』、第 231 頁。
- 84) 直隸省学校司督辦：1902 年 5 月袁世凱によって学校司は創設された。『直隸新設学校司章程』によれば、学校司には専門教育処、普通教育処、翻訳処、支発所、稽查所を置いた。全省の各種学堂の業務や教科書、参考書の翻訳刊行を担当させた。トップの長官は督辦であり、下に参議、顧問官及び上記三処の総辦が設けられ、いずれも総督が任命することとなる。参考：汪婉「直隸省における『査学』の設置と巡視活動（上）」『中国研究月報』62（5）、第 2～3 頁。
- 85) 「学堂楽歌」20 世紀初期において、沈心工を初めとする日本からの中国人留学生は、帰国後、日本の唱歌教育からヒントを得て、唱歌の旋律に中国語の歌詞をつけ、これを教材として用い始めた。これらの唱歌は「学堂楽歌」と呼ばれた。その時期では、西洋音階や楽典知識を普及させただけでなく、歌詞を通じて愛国的・反封建的な思想を鼓吹する役割をも果たした。
- 86) 榎本泰子『楽人の都・上海』、東京：研文出版、1998 年、第 24 頁。前掲張前『中日音楽交流史』、2012

年。

参考文献（五十音図順）

資料

- 伊沢修二『小学唱歌』、『音楽基礎研究文献集』第 17 巻、東京：大空社、1991 年、第 46 頁。
- 『益世報』（1915～1949）。
- 『音楽界』第 1 巻第 9 号、筆者蔵。
- 『北洋官報』1907 年第 1507 期。
- 『北洋官報』1907 年第 1577 期。
- 『弘文学院章程要覧』第 1 章、東京大学明治新聞雑誌文庫蔵。
- 「奏派調査直隸学務員報告書（続）」、『学部官報・京外学務報告』、全国報刊索引データベース、<https://www.cnbksy.com/>。
- 『直隸教育雑誌』1907 年第 18 期、全国報刊索引データベース、同上。
- 陳元暉編『中国近代教育史資料滙編 実業教育・師範教育』、上海：上海教育出版社、2007 年。
- 『東方雑誌』1908 年第 3 期。
- 東京音楽学校在籍者データベース <http://fms.ms.geidai.ac.jp/fmi/iwp/cgi?-db=%EF%BC%96%EF%BC%8E%E6%9D%B1%E4%BA%AC%E9%9F%B3%E6%A5%BD%E5%AD%A6%E6%A0%A1DB&-loadframes>。
- 細川周平、片山杜秀監修『日本の作曲家 近現代音楽人名事典』、東京：日外アソシエーツ、2008 年。
- 『学部官報・京外学務報告』、全国報刊索引データベース、同上。
- 『嚴修東遊日記』嚴修撰、武安隆、劉玉敏点注、天津：天津人民出版社、1995 年。
- 『嚴修年譜』嚴修自訂、高凌雯補、濟南：齊魯書社、1990 年。
- 『直隸教育雑誌』（1905 年 1 月～1911 年 10 月）。
- 『大公報』（1902～1956）全国報刊索引データベース、同上。
- 『中国近代学制史料』（第二巻・下）華東師範大学出版、1992 年、第 554 頁。

著作

- 榎本泰子『楽人の都・上海』、東京：研文出版、1998 年。
- 汪婉『清末中国対日教育視察の研究』、東京：汲古書院、2001 年。
- 汪向荣『日本教習』、北京：商務印書館、2014 年。
- 関曉紅『晚清学部研究』、広州：広州教育出版社、2000 年
- 靳学東『津沽楽縁尋跡：天津近現代音楽史料研究』、北京：中央音乐学院出版社、2019 年。
- 孫繼南『中国近代音楽教育史紀(1840～2000)』、上海：上海音乐学院出版社、2012 年。
- 谷忠玉『中国近代女子観的演変与女子学校教育』、合肥：安徽教育出版社、2006 年。
- 陳元暉『中国近代教育史資料滙編 実業教育・師範教育』、上海：上海教育出版社、2007 年。
- 天津市嚴修研究会等編『嚴修記念文集』、天津：天津古籍出版社、2021 年。
- 武石みどり『音楽教育の礎 鈴木米次郎と東洋音楽学校』、東京：春秋社、2007 年。
- 来新夏『天津近代史』、天津：南開大学出版社、1987 年。
- 大悟法利雄『なつかしの鉄道唱歌』東京：講談社、1969 年。
- 財団法人芸術研究振興財団/東京芸術大学百年史刊行委員会編：『東京音楽学校篇』第 1 巻、東京：音楽之友社、1987 年。

張前『中日音楽交流史』、北京：人民音楽出版社、1999 年。

朱鵬『中国近代教育の成立』、京都：松籟社、2021 年。

姜華『高等女学校における良妻賢母教育の成立と展開：教育理念・修身教科書・学校生活の総合的研究』、東京：東信堂、2022 年。

雑誌

汪婉「直隸省の教育改革と官紳の日本游歴」『史学雑誌』106（3）、第 84~106 頁。

汪婉「直隸省における『査学』の設置と巡視活動（上）」『中国研究月報』62（5）、第 1~18 頁。

尚大鵬「清朝末期における体操科教員養成機関に関する一考察」、『広島大学大学院教育学研究科紀要第三部、教育人間科学関連領域』51 号、第 67~72 頁。

劉行宜『盧木齋、盧慎之兄弟』、中国人民政治協商會議天津市委員会文史資料委員会編、天津文史資料選輯、第 17 輯、天津：天津人民出版社、2014 年、第 97~135 頁。

朱鵬「嚴修の新学受容過程と日本—其の二・天津の紳商と近代初等学堂をめぐって」『天理大学学報』51（1）、第 177~199 頁。

姜華「高等女学校における良妻賢母教育の実際に関する一考察」『早稲田大学大学院研究科紀要』19（1）、第 81~91 頁。

周東怡「清末訪日視察風潮中知識分子的活動——以嚴修的教育活動及其貢獻為探討中心」、『台湾師大歷史学報』2011—46、第 231~288 頁。

McElroy Sarah Coles. *Transforming China through education: Yan Xiu, Zhang Boling, and the effort to build a new school system, 1901-1927*, Yale University Pro Quest Dissertations Publishing, 1996.